

野口医学研究所 Children's Hospital of Philadelphia エクスターンレポート

手稲溪仁会病院

山口 宏

今回、私は2013年8月5日から8月23日までの3週間、野口医学研究所の御支援の元、Children's Hospital of Philadelphia で研修させて頂いたので報告する。

Children's Hospital of Philadelphia は2013-2014年のU.S.Newsで全米N.O.1こども病院に選ばれた病院で約500床を有する名実ともに優れたこども病院である。外観は写真のごとく非常にきれいである。病院のセキュリティーは非常に厳しく、病院入口では外来であっても親の顔写真をとってIDを作成する必要があるようだった。病院の中に入ると右手には写真のごとく吹き抜けがあり、そこにはラジオ局があって度々有名人が訪れてこども達を励ましに来るようである。私の滞在したときにはMaroon 5が来ていてこども達を励ましていたのが非常にアメリカ的であると感じた。

研修の3週間、基本的には病院南棟8階のGeneral Pediatrics およびPulmonary wardで研修を行った。二つの科を合わせると最大24床である。私がお世話になったチームの編成は、attending、fellow、PGY4、PGY2が各1人ずつ、PGY1が3-4人、med-studentが4-5人という編成であり、attendingとfellowは毎週交代、その他は2-4週間でローテーションをするという体制であった。朝はPGY1以下がおよそ6時に、PGY2以上は朝7時半に病棟に来るということだった。朝7時半までに当直医からの申し送りを受け、チームとしては7時半から始動していた。

日本とアメリカの病棟の作りは大きく異なる。Children's Hospital of Philadelphiaは多くが個室で部屋は巨大であり、イメージとしては日本の4床の大部屋の中に一床あるような非常に恵まれた環境であった。病棟には移動式任天堂Wiiが十数台常備され、こども達は自由にそれを使うことができるとのことだった。病棟はカラフルで非常にきれいである。服装も日本とは異なり、基本的に白衣を着ない。ワイシャツにスラックスが主流で、女性医師の中にはこれからパーティーに行くのかというぐらいにドレスアップしている方も散見された。病室に入る際には手の消毒は徹底されており、ほぼ必ずガウンを着て入室するので確かに白衣は必要ではないようであった。

朝7:30からチーム回診が始まるが、終わるのは大体昼の12時くらいで各部屋の前に電子カルテが入ったコンピューターを3台持って行き、それぞれの患者さんのプレゼンテーションをPGY1以下が行っていた。多くの場合、両親が部屋から出てきて一緒にプレゼンテーションを聞いており、両親も治療に参加しているような感じであった。その他ナースやソーシャルワーカー、PTやSTもカンファの輪に入ってきて総勢20名近くになり、熱い議論が繰り広げられていた。チーム医療というものがよくわかり勉強になった。一人の患者さんについては15-20分くらいかけ、現在の疾患以外にも栄養状態、社会的問題、退院後のフォローまで話し合う。日本では5分くらいで終わりそうなものだが、毎日それく

らい時間をかけてじっくりと診療を行うのである。プレゼンテーションが終わると attending や fellow、PGY4、PGY2 からのミニレクチャーがあり、非常に有意義であった。General pediatrics の患者で一番印象に残ったのは、3 週間の発熱と口腔内潰瘍で、様々な検査（日本にはないシャーガス病やトリパノソーマなどの抗体検査もだしていたのが面白かった）を提出し、消化器科にコンサルトをして内視鏡検査をしたり、腫瘍科にコンサルトをして骨髄生検をしたり、他科との連携も非常に良く思われた。結局帰国まで診断はつかなかったのが残念であった。Pulmonary ward では何と言っても日本ではまず見ない Cystic fibrosis であり、この 3 週間だけでも 10 数人見ることが出来た。中には手術室で気管支鏡まで見学させてもらえたことは非常に有意義であった。またまれな疾患である pulmonary hemosiderosis や世界に数人しかいない congenital abnormality の患者なども見学できたことは非常に興味深かった。そのような珍しい疾患や難しい症例を担当している resident や med-student は非常に優秀であり、プレゼンテーションも上手にこなしているところには非常に驚かされた。その他、attending のレクチャー（卵巣頸捻転の case、医師としての人生設計、domestic violence など）、PT の呼吸器レクチャー、実際に起こりうる呼吸状態の悪化場面で人形を使つての練習など盛りだくさんであった。

2 週目に Emergency department (ED) attending の Dr.Callhan の御好意により、ED を 3 日間見学した。ED は 8 時間の交代性であり、attending, fellow, PGY2-3 人、med-student 2-3 人という編成で 6 チームからなる。ED のベットはなんと 32 床もある。疾患としては日本では見ることのない sickle cell anemia を初日だけで 4 人見たから驚きである。その他、軽症な患者からアメリカならではの common な child abuse の赤ちゃんまで多岐に渡っていた。一番印象に残ったのは 2 日目の朝 8 時に業務開始と同時に trauma room 3 の emergency call が館内に鳴り響き、多くの医師と看護師が trauma room 3 へ駆けつけた。何事かと思えば生後 3 週目の赤ちゃんが 3 日間の下痢と嘔吐で四肢がチアノーゼで真っ青になっておりショック状態であったのである。attending Dr. と fellow の手動のもと、各医師と看護師が適格に動き、末梢ルートがとれないと判断するや否や骨髄針が留置され、各処置もスムーズにあたかも当たり前のように進んでいった。驚くことにこの蘇生の場面はビデオ録画されており、さらにその蘇生を家族の前で行うのである。すべてをつつみ隠すことなく、医療を施行するという表れであろう。最終日にはその週に ER を受診した患者さんから放射線科カンファレンスがあったり、Dr.Callhan から oncology emergency の講義があったり、これらもとても参考になった。

さらに一日だけだが小児集中治療で御高名な西崎先生の御好意により、PICU も見学させて頂いた。なんと 55 床もあり attending は 25 人もいて、非常に重症な患者さんも全国から転院搬送されてきており、さすが全米 N.O.1 の病院という印象を受けた。

この 3 週間での大きな収穫は非常にまれな疾患や重症な疾患を見ることができたこと、日本とアメリカの医療の違いを理解できたこと、アメリカの医学生および研修医の教育を見ることができたこと、アメリカの文化を勉強することができたことは非常に実りが多く、

非常に有意義な研修ができたと感じた。さらに多くの優秀な医師と知り合うことができ、今後診断困難な疾患などに会った際に相談できることは、今後の医師人生において非常に大きいと感じた。帰国した後は、今回学んだことを是非自分の今後の診療に生かしたいと強く思った。

最後にこのような貴重な体験をさせて頂いた野口医学研究所に感謝致します。特に研修までの手続きを行って頂いた小山さん、滞在中に食事に連れて行ってくれ、Philadelphiaの生活や研修の受け方まで細かく教えてくれた Mr.Kenney、CHOP 研修の事務一般の手続きを行ってくれた Mrs.Collen King、研修一般の調整をしてくれたチーフレジデントの Dr. Andrew、General pediatrics と Pulmonary の attending、fellow、PGY Dr の先生方と med-students の方々、心よく研修を受け入れてくれた ED の Dr.Callhan、PICU の見学および、その夜に食事会を開催して頂いた Dr.Nishisaki と奥様、多くの方々の御支援のもと無事研修を終えることができました。感謝申し上げます。

